



年間第 4 主日 (ルカ 4:21-30)

敵意の中を悠然と立ち去るイエス

「しかし、イエスは人々の間を通り抜けて立ち去られた。」(4・30) 先週のイエスの恵み深い言葉は会堂内にいる人々に期待を持たせましたが、人々が期待していたのは社会一般に行われている地元への利益誘導とか身内にもたらされる特権とかでした。イエスは政治家でもなく、権力を用いて身内に恩恵をもたらす人でもありません。人々が勝手に思い描いていた期待は崩れ去り、イエスは人々の憎しみに取り囲まれます。絶体絶命の危機に、イエスは何を思ったのでしょうか。

司祭団マラソン大会は、まずまずの成績でした。去年のタイムを更新したからです。「悔いはないか？」と言われたら、もう少し走れたかも知れないなあという悔いがあります。9キロのマラソンを走りきった翌日には、浜串の海に出てイトヨリ釣りを満喫していたからです。筋肉痛で一步も動けないほど走っていれば、翌日ウキウキしてボート釣りなどできないはずですから。

教会敷地の道路向かいに、黒毛和牛の像が設置されましたね～。私は賄いさんにこう言いました。「これから牛肉は買いに行かずに、こっそり包丁で削ってくるだけでいいよね。」さらにこう付け加えました。「あんまり頻繁に行くと牛に怒られるからね。」「どんなふうですか？」と言うので、「『もう～』って怒られるさ」と言いました。

「これを聞いた会堂内の人々は皆憤慨し、総立ちになって、イエスを町の外へ追い出し、町が建っている山の崖まで連れて行き、突き落とそうとした。」(4・28-29) かわいさ余って憎さ百倍と言いますが、まさにそういう状況でしょう。けれども人々はイエスに怪我一つ加えることができませんでした。利益誘導を期待していたのも事実でしょうし、身内が恩恵にあずかれるかも知れないと思っていたのも事実でしょう。だから対抗も反論もできなかったのだと思います。

敵意と憎しみの中を通り抜けて、イエスは悠然と立ち去っていきます。今週の聖書朗読の中でいちばん最後、もしかしたら中心部分ではないのかも知れませんが、私はイエスの姿を見送るようにしてじっと眺めてみました。どんな思いだったのでしょうか。

一つ考えられるとしたら、イエスがエルサレムに入られる場面です。イエスは子ロバを用意してもらい、それに乗ってエルサレムに入られます。マタイ福音書を引用すると、「そして群衆は、イエスの前に行く者も後に従う者も叫んだ。『ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。いと高きところにホサナ。』」(マタイ 21・9) ここでイエスは歓喜の声に迎えられています。彼らがまもなく「十字架につけよ」と叫ぶことをご存じでしたから、歓喜の声を気に留めることもなく、悠然と通り抜けたのだと思います。

両方に共通するのは何でしょうか。それはイエスを取り囲んでいる人が歓喜の声を上げても憎しみを燃え上がらせても、イエスはその声に

振り回されなかったということです。敵意の中でも歓呼の中でも悠然とその中を通り抜けることができたのは、イエスが王の中の王であったからです。父である神が王であるキリストの保証であり、民衆が一喜一憂しても、全く振り回されることはなかったのです。

自分自身に当てはめて考えてみました。ミサが始まる時、入祭の歌に合わせて入堂します。特に大祝日のミサでは聖堂中央の通路を通って入堂します。参列者の様子が気になります。聖歌に力がなければそれも気になります。今日のミサは何人か。いろいろ気にして通路を歩いているのです。

もっとイエスのように、悠然と入堂できるはずです。私がささげる礼拝は、父なる神へ、会衆とともにイエスによってささげる礼拝です。今日のミサに何人出席していようが、それが何だというのでしょうか。揺るぎない心で、入堂し、ミサをささげる。イエスが人々の間を通り抜けて立ち去られたあの場面を思い巡らしながら、自分自身の取り組む姿勢を考えさせられたのです。

皆さんも、イエスが敵意の中を通り抜けて立ち去られた場面から、ふだんの生活を思い起こしてみましょ。皆さんの中には、家庭で祈りをしている方もおられるでしょう。一方で内心は「ほとんどのカトリック信徒は、朝晩の祈りをしていないかも知れない」という疑いも持っているかも知れません。

それが何だというのでしょうか。私は朝晩の祈りを全うする。祈りを受け取るのは父と子と聖霊の神です。周りを気にして何になるでしょう。神様と私だけが、ささげている朝晩の祈りを知っています。それだけで十分ではありませんか。祈りを受け取ってくださる神だけが、私を今日生かしてくださるのです。

ある日、五島から長崎に向かうフェリーの甲板上で、一人の先輩司祭が私にこう言いました。「俺は最後まで司祭職を全うする。たとえ長崎教区のすべての司祭が職務を全うできなかったとしても、私は全うする。そういう覚悟だ。」

ひょっとしたら私が、先輩をうさんくさい目で見っていたのかも知れません。私の目が「お前はチャラ男だ」と訴えていたのかも知れません。あのフェリーで交わした会話が、その先輩と交わした数少ない会話です。言葉で言ったことはないですが、この先輩すごいなあと思いました。

イエスは敵意に取り囲まれている中を、悠然と通り抜け、立ち去って行かれます。私たちカトリック信者も、熱心に信仰してどうなるのだと、静かな敵意の中に取り囲まれています。イエスのように、悠然と通り抜けましょ。

堅信式、初聖体式を控えている子供達も、強い気持ちでいて欲しいと思います。カトリックの信仰を守り抜くということは、いつの時代でも火の中・水の中を通るよりも難しい道なのです。それでも悠然と、堅信式、初聖体式を通り抜けることにしましょ。私たちが見るべき相手は、わたしたちを生かし、救ってくださる全能の神なのです。